

「麻布未来写真館」

ファインダーをとおして、未来に向けた新しい麻布を発信していきます。

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会
平成23年度活動報告
港区麻布地区総合支所

はじめに

本活動報告は、港区麻布地区総合支所の地域事業「麻布未来写真館」（平成 21 ～ 23 年度）において、区民参画組織「麻布を語る会・麻布未来写真館分科会」が平成 23 年度に取り組んだ活動の記録です。

「ファインダーをとおして、未来に向けた新しい麻布を発信していきます。」

写真には写された記録だけではなく、多くの人々にとっての体験の「記憶」をも含められた、かけがえのない価値が備わっています。

本活動報告に掲載された写真は、新しいものも古いものも全て、ファインダーをとおして「麻布」をめぐる様々な人々の記憶を未来につなぐ貴重な記録です。

麻布の未来に向け、麻布地区総合支所は、多くの方々に記録と記憶の価値を伝え、区民の皆様への地域への共感や愛着をより一層高めてもらえるよう取り組んでまいります。

活動を進めるにあたり、様々なかたちでご尽力をいただきました関係者の皆様に、心から御礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月 港区麻布地区総合支所協働推進課

《 目 次 》

I. 分科会活動の概要	01
「麻布未来写真館」とは	01
パネル展の開催	02
II. 分科会メンバー作成パネルの紹介	03
パネルの作成	03
A グループのパネル	04
B グループのパネル	16
III. これまでの活動を振り返って	31
メンバーのことば	31
IV. 参考資料	36

区民参画組織・麻布を語る会とは

麻布地区総合支所では、平成 18 年に新たな総合支所制度を導入して以来、地域に住み、働き、学び、活動する多くの人々が区政に参加し、地区の課題の解決策や将来について、ともに議論し、協働によって目標を達成していく「参画」と「協働」の取り組みに力を入れてきました。

「麻布を語る会」とは、区民の参画と協働により、麻布地区の将来像「生活者優先の、安全で安心して快適に住み続けられる国際・文化都市」の実現に向け、区民主体の検討や取り組みを進めるために設置された麻布地区の区民参画組織です。

メンバーは、麻布地区内に居住、勤務、在学し、又は麻布地区のために活動したい公募区民によって構成され、平成 24 年 3 月現在、「麻布未来写真館」・「基本計画協働推進」・「地域情報の発信」の 3 つのテーマに分かれて分科会を設置し、それぞれ活発な取り組みを進めています。

「麻布未来写真館」とは

麻布未来写真館事業実施の背景

麻布地区は、区内にある大使館の半数以上が集中し、外資系企業も多く立地するなど、国際的な「まち」です。また、外国人が多く利用する六本木の繁華街は、麻布の「まち」の国際的な魅力を高めることに貢献しています。麻布には由緒ある寺院や、毛利庭園のように大名屋敷の面影を今に残す庭園や、小説や落語に登場する坂や町名も多く残る歴史と文化の「まち」でもあります。

一方、アークヒルズ、泉ガーデンや六本木ヒルズ等に代表されるように、大規模なまちづくりによって「まち」が大きく変化しています。こうした大規模なまちづくりにより、貴重な歴史的資産や文化資産が喪失することがないようにするとともに、外国人を含む、麻布に暮らす多くの人びとに麻布の歴史や文化をもっと知ってもらい、麻布の「まち」をより身近に感じ、愛着を感じてもらうための取り組みが重要です。

事業の趣旨

平成 21 年度から港区麻布地区総合支所では、区民や企業、大学等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取り組みとして「麻布未来写真館」事業を運営しています。

当事業の運営により麻布地区の資料収集・保存していくことを通じて、麻布地区に暮らす人々にとって身近な歴史・文化資源を保全・継承するとともに、より一層の活用を目的としています。

同時に、「まち」の歴史や文化をより多くの皆様に知っていただき、麻布地区への愛着を深めていただく一助となることを目指しています。

区民との協働事業

平成 23 年度は、広報紙等の募集を通じて集まったメンバーにより、撮影テーマ・箇所選定のためのワークショップ、まち歩き・撮影等を実施し、3会期に分けてパネル展を開催してまいりました。

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会メンバー（平成 23 年 3 月 1 日現在）

Aグループ

小山 浩（副座長）、臼井 浩之、増子 照孔、
水野 禮子、横島 久子

Bグループ

近藤 敏康（座長）、天羽 大器、磯 和子、入江 誠、
岡崎 純子、櫻井 綾、鈴木 順二、椿 由美子



分科会（グループワーク）の様子

I 分科会活動の概要

パネル展の開催

「麻布未来写真館」事業の一環として、これまでに引き続き開催した「パネル展」では、分科会活動の中で検討したテーマに基づき各グループが作成したパネルを展示しました。

事業開始から3カ年目を迎え、分科会メンバーの尽力とともに、地域の様々な方々から、写真等のご提供など、多大なご支援とご協力を賜り、質・内容とも従前にまさる展示内容とすることができました。

今年度はパネル展を3期にわたり、延べ5会場で開催いたしました。各会場では、分科会メンバーが各グループで設定したテーマに基づき作成したパネルを展示いたしました。

パネル展スケジュール

◆第1期パネル展

日時：平成24年2月3日（金）～23日（木）10:00～19:00

会場：富士フィルム フォトサロン ミニギャラリー（フジフィルム スクエア）

※最終日は16:00まで

◆第2期パネル展

日時：平成24年2月20日（月）～3月2日（金）9:00～17:00

会場：東洋英和女学院 本部・大学院棟 1階 史料展示コーナー

ありすの杜南麻布 1階 地域交流スペース

麻布地区総合支所 1階 ロビー

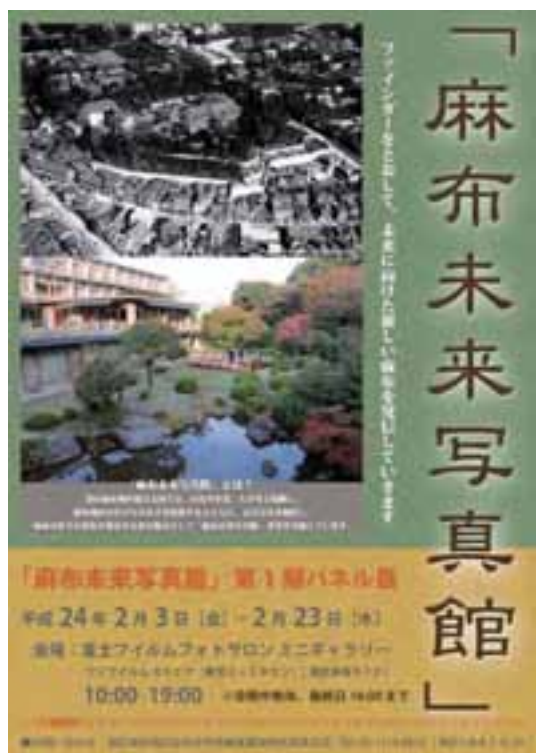
※東洋英和会場は日曜休み、最終日16:00まで

◆第3期パネル展

日時：平成24年3月19日（月）～3月30日（金）9:00～17:00

会場：港区役所 1階 ロビー

※土曜・日曜・祝日休み



第1期パネル展ポスター

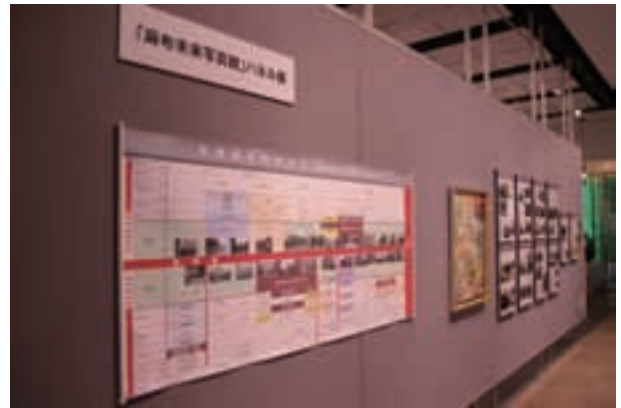


第2期・第3期パネル展ポスター

パネル展の様子



富士フィルムフォトサロン ミニギャラリー



富士フィルムフォトサロン ミニギャラリー



東洋英和女学院 史料展示コーナー



ありすの杜南麻布 地域交流スペース



麻布地区総合支所 ロビー



港区役所 ロビー

古い写真の収集など

平成 21 年度から「麻布未来写真館」では、区民や企業、大学等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集しています。平成 23 年度は、約 300 枚の写真を区民や管内教育機関等より提供していただきました。

今年度までに収集した写真は、各パネル展等で活用し、多くの方々に麻布地区の歴史・文化を知っていただくための一助となりました。

また、パネルの作成にあたっては、港区立港郷土資料館からも多くの写真を提供していただきました。

会場提供等、ご協力をいただいた方々からのメッセージ

山本 佳之（フジフィルム スクエア 館長）

フジフィルム スクエアでは本年も2月3日(金)から2月23日(木)まで「麻布未来写真館」のパネル展示をさせていただきました。昔の街の様子と同じ場所の現在の様子を比較して見ることができ、また関連資料などから、とても楽しめる展示をしていただいたと感謝しております。

ご来館いただいたお客様からも「昔、この家にいったことがある」や「この通りが懐かしい」などの、かつての麻布を懐かしむお声や、逆に現在の麻布しか知らない世代には「こんな風だったんだ」などのお声を多数いただきました。

このように昔と今を比べて見ることができるのは、まさに「写真の記録的価値」といえるもので、私どもが皆様にお伝えしていきたい「写真の価値」を多くの方に見ていただけたと思います。

私どもも引き続き地域の皆様と一緒に麻布の過去・現在・そして未来への記録を見続けていきたいと存じます。

酒井 ふみよ（東洋英和女学院史料室）

鳥居坂周辺の歴史をこれまで断片的にしか知らなかったのですが、通りに沿って江戸時代から年代別に表に表わしてくださったのがとてもわかりやすく、東洋英和の初期のころのイメージがつかみやすくなりました。また、史料展示コーナーを初めて学院外の催しに提供したことで、これまで以上に地域の方々とのつながりを実感できるようになりました。

歴史を掘り起こすことで現在を再認識し愛着を覚えることは、この地にあって確かな未来を共有していく基になると思います。

パネルや活動報告書などの成果を利用させていただいて生徒にも話すことができ、「麻布未来写真館」の活動に加えていただけたことを感謝しています。

佐藤 晶（ありすの杜南麻布 地域交流スペース）

このたびは地域交流スペースをご活用いただきありがとうございました。

ありすの杜施設内の入居者様及びレストランをご利用の外部の方々等、多数の方にご覧いただき感想などを伺っていますので一部ですが明記させていただきます。

- ・麻布の街の時間の流れを感じる
- ・昔を懐かしく思い出しました
- ・もっと昔の写真も見てみたいです
- ・季節も感じられる写真もあればもっと良かった
- ・字が小さくて読み難かった
- ・もっと大きな文字とパネルで開催して欲しい
- ・もう少しメリハリが欲しい

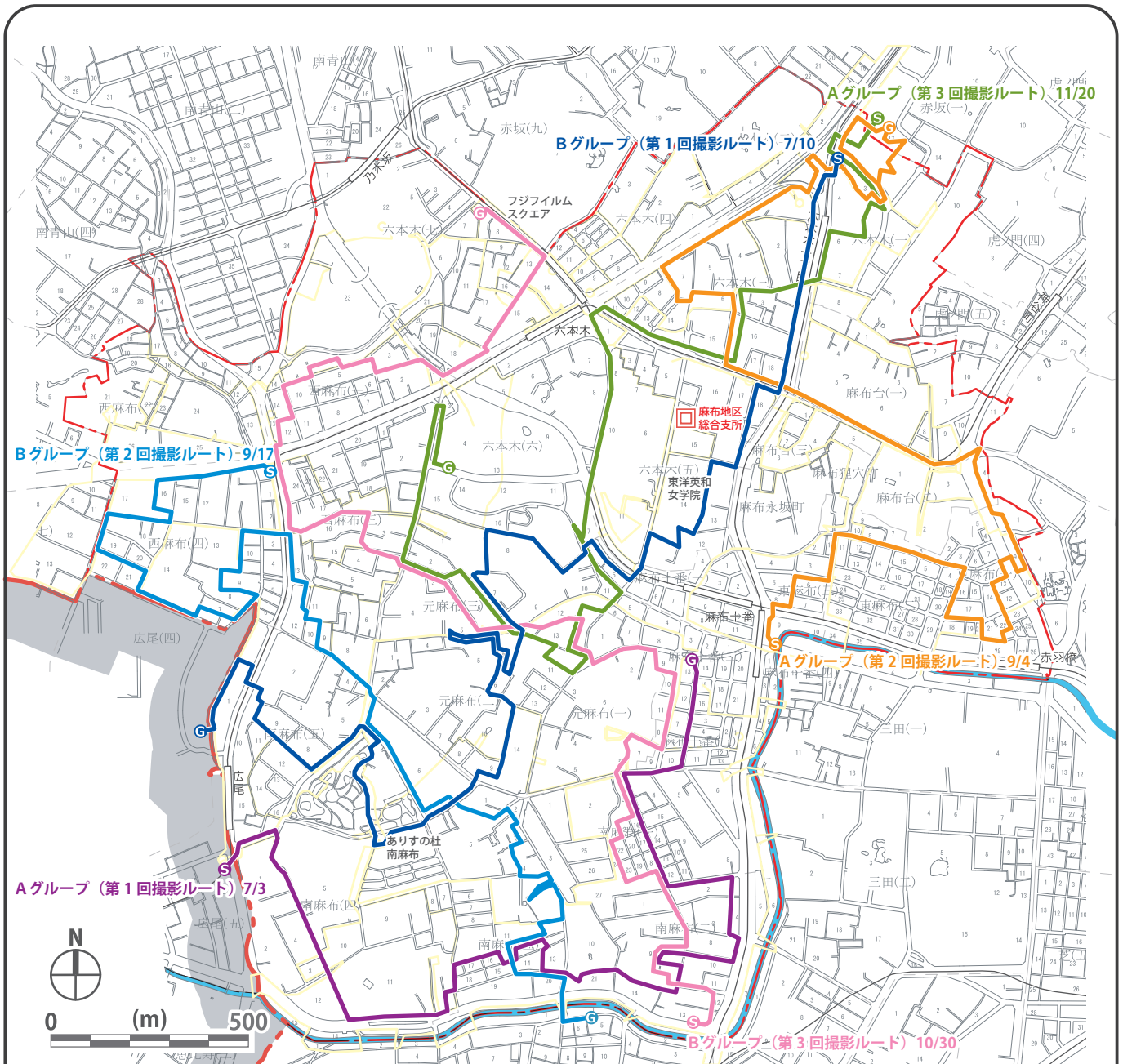
以上のような感想等をお聞きしましたので、お伝え致します。

1枚1枚に一人ひとりの思い出を、写真を見ながらおしゃべり出来るような。今後も麻布という街を知ってもらい地域交流スペースを多くの方にご利用頂けるように、季節感溢れる定期的な開催を希望します。

パネルの作成

パネルの作成にあたっては、「麻布未来写真館」事業で麻布のまちの変化を保存する取り組みとして行っている「まち歩き(撮影)」での写真やパネル作成のために個別撮影した写真、また区民や管内教育機関等より提供していただいた写真や資料を活用しました。

なお、「II. 分科会メンバー作成パネルの紹介」には、今年度の分科会活動で、港郷土資料館などの協力のもと、写真・文献等の資料により、A・B各グループの分科会メンバーが独自に調査し、作成したパネルの内容を掲載しています。



まち歩き (撮影)

今年度の分科会活動では、A・B各グループ 3 回ずつ (計 6 回)、上記の撮影ルートにより、まち歩き (撮影) を行いました。

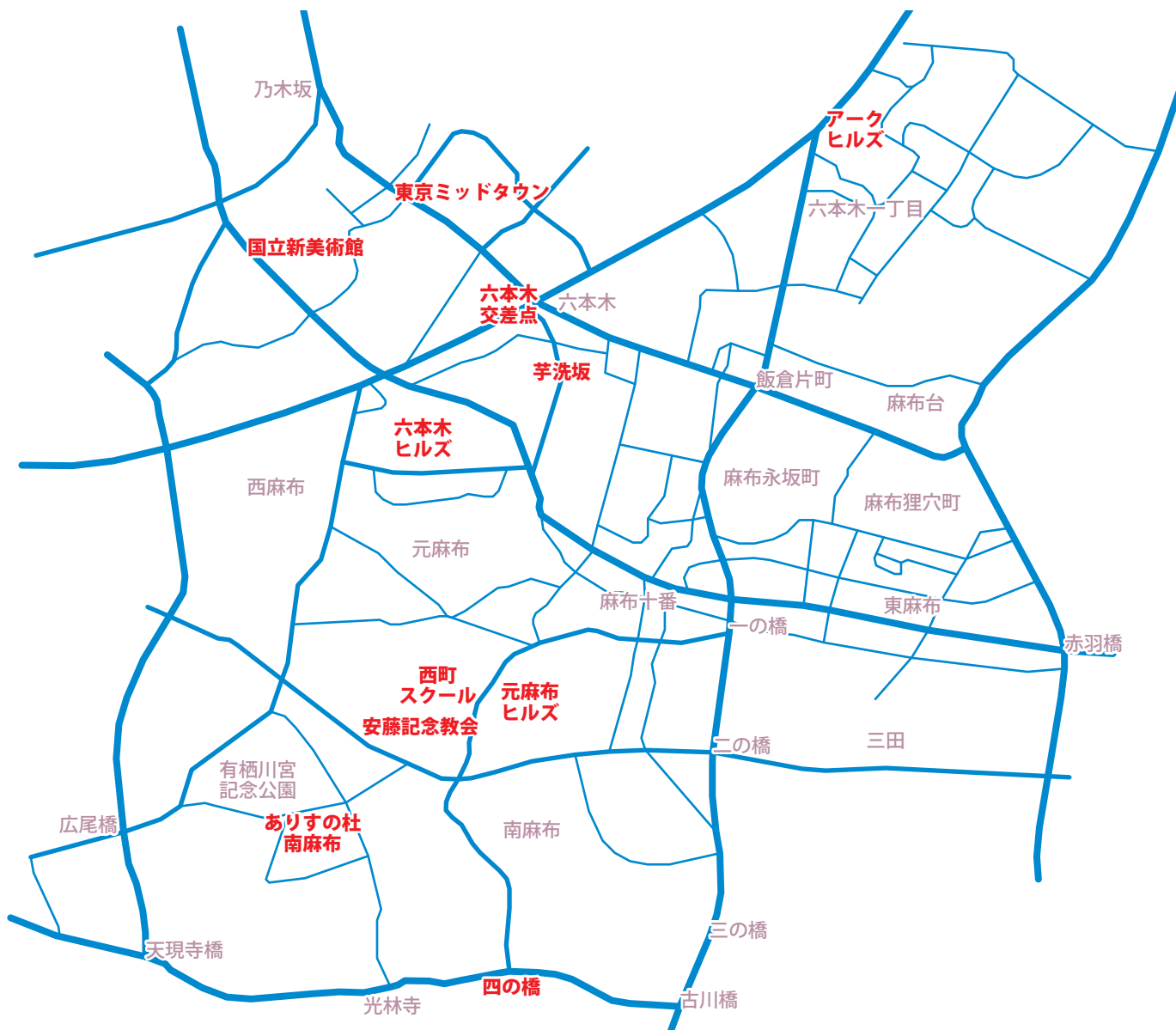
変わりゆく麻布地区のまち並み

平成 21 年度のパネル展では麻布の「昔と今」と銘打ち、明治時代から戦後までと今を写真で比較し、その変貌を見ていただきましたが、今回は 1980 年代以降の麻布の変化を追ってみました。

港区、特に麻布地区は日本の中でもまち並みの変化の速いところであり、この間に行われた再開発も多く、再開発の対象となる地理的、歴史的背景を備えていると言えます。

再開発をきっかけに、近隣にも変化が広がり周辺道路も整備されていき、良好な街路環境が来街者を呼び、まちのにぎわいを拡大していく。一方、麻布は江戸時代からの歴史や文化を色濃く残しており、このような変わらないものを求めて麻布に来る人も多い。

まちの変化を「麻布未来写真館」と一緒に捉えていってほしい。



＜写真について＞

各パネルとも新と旧の比較を行っているが、必ずしも同一視点からの撮影にはなっていない。開発や建築で同一視点からの撮影が出来ない場合もあり、また、変化の様子をとらえるためにあえて周辺のまち並みも写してイメージの伝わる構図とした。

また、写真に写っている個人や所有（車等）の特定を避けるため、さらに撮影条件、画像の経年劣化等を補うために軽微な画像加工を一部加えている。

六本木一丁目 (旧: 谷町) 【1】



【資料：『24 時間都市 ARK HILLS』 社団法人全国市街地再開発協会】



平成 23 年 (2011 年)



【資料：『24 時間都市 ARK HILLS』 社団法人全国市街地再開発協会】



平成 23 年 (2011 年)



平成 23 年 (2011 年)



平成 23 年 (2011 年)

六本木交差点から市三坂を下り谷町から溜池の手前右側が 17 年の歳月をかけ再開発され、昭和 61 年 (1986 年)「アークヒルズ」としてオープンした。開発前は木造家屋が密集し、狭い路地や階段、銭湯の煙突もうかがえるまちだった。

「アークヒルズ」はオフィスやホテル、コンサートホールや商業施設が整った大複合施設として完成した。現在、近隣ではさらなる再開発も進んでいる。

Aグループのパネル 近年の麻布の変化を追って

六本木一丁目 (旧：谷町) 【2】



【資料：『24 時間都市 ARK HILLS』 社団法人全国市街地再開発協会】



平成 23 年 (2011 年) 上下とも



平成 23 年 (2011 年)

再開発前には商店が軒を連ねる通りもあった。左の写真は左上の写真とほぼ同じ位置から撮影したもの。当時の面影はなく、スペイン大使館へと続く道として整備された。現在は、道幅も広く歩道も設けられ歩きやすくなり、高層住宅も建設された。付近は桜の名所ともなっている。

六本木一丁目 (スペイン坂周辺)



昭和 57 年 (1982 年) 【写真提供：小山浩 氏】



平成 23 年 (2011 年)

スペイン坂を登り切ったところに、その名の通り「スペイン大使館」がある。左の写真はアークヒルズが開発されている時期のスペイン大使館。霧囲気のある館が緑に包まれ、周りは高い建物がほとんどない。右の写真では、スペイン大使館も近代的な建物に変わり、以前の建物は外からは見えず、周囲に高い建物が迫っている。

防衛庁→東京ミッドタウン



平成9年（1997年）頃



平成23年（2011年）

江戸時代、毛利家の下屋敷であったこの地は日本陸軍歩兵第一連隊の兵舎として利用されていた。終戦後、連合国の占有を経て長年、防衛庁があった。平成19年（2007年）に東京ミッドタウンがオープン。今までにない賑わいを見せている。

六本木七丁目（東京ミッドタウン西交差点）



平成10年（1998年）頃



平成23年（2011年）

東京ミッドタウンのオープン後、向かい側に並んでいたマンションを含めたいくつものビルが取り壊された。現在は暫定的に外国車のショールームとなっている。国立新美術館への入口となるこの交差点周辺は、今後、道路も拡幅され大規模な再開発が予定されている。

日本陸軍第三連隊→東京大学生産技術研究所→国立新美術館



昭和 57 年（1982 年）【写真提供：小山浩 氏】



平成 23 年（2011 年）

昭和 3 年（1928 年）に日本陸軍の歩兵第三連隊の兵舎として竣工したこの建物は、昭和 11 年（1936 年）まで陸軍が駐屯、まさに軍隊のまち麻布の象徴であった。終戦後は連合軍が接收、その後、昭和 37 年（1962 年）から東京大学生産技術研究所（一部は物性研究所）として利用されていた。生産技術研究所は平成 13 年（2001 年）に駒場キャンパスへ移転。建物も取り壊され、今では国立新美術館になっている。右上の写真は国立新美術館の背面が見えている。遠景の様子もずいぶん変わった。



平成 23 年（2011 年）



平成 23 年（2011 年）

左手前が政策研究大学院大学、右奥が国立新美術館。その間に昔の建物の一部が記念に残されている。

六本木交差点



昭和 57 年（1982 年）【写真提供：六本木商店街振興組合】



平成 23 年（2011 年）

国際都市と言われる六本木の中心、この交差点も今では様変わりした。首都高速の外装も時計塔も花壇も変わった。アモンドが入っているビルもモダンなすっきりとしたデザインとなった。現在は歩道の高質化整備も進んでいる。

東京タワー

東京タワーは昭和 33 年（1958 年）に竣工した電波塔で、地上 333m は自立型建造物高さ日本一を誇っていた。

スタイルも少し変わり、照明のイメージは大きく変わったが、今も変わらず東京のシンボルである。手前に見える六本木のまちの夜景も変わった。



昭和 62 年（1987 年）【写真提供：六本木商店街振興組合】



平成 23 年（2011 年）

芋洗坂



昭和 57 年（1982 年）【写真提供：港区立港郷土資料館】



平成 18 年（2006 年）【写真提供：港区立港郷土資料館】

芋問屋があったことからこの名前が付いた坂。

六本木交差点と六本木ヒルズを結ぶ道であるが、このころは電線地中化前で、歩道も狭く歩きにくい。奥にはすでに東京ミッドタウンが建っている。



平成 23 年（2011 年）

電柱と電線が全て地下に埋められ、歩道も広くなり、街路灯やボラード（車止め）等も新しく整備された。

元麻布一丁目付近（一本松坂）



平成 10 年（1998 年）頃【写真提供：森ビル株式会社】



平成 23 年（2011 年）

麻布十番から大黒坂を上がってくると暗闇坂と一緒に、一本松坂となる。写真は一本松坂上付近。

上の写真の道路左側が「元麻布ヒルズ」として再開発され、道路直近の空間を設けながら整備された。右側はほとんど変わっていない。

少しアングルを変えると高層住宅が見えてくる。



平成 23 年（2011 年）

元麻布三丁目付近



平成 10 年（1998 年）頃【写真提供：森ビル株式会社】



平成 23 年（2011 年）

元麻布 3 丁目の駐車場から東北方面を望んだもの。高い建物は一切見られない。左の写真の撮影場所（駐車場）には現在集合住宅が建ち同じ位置からの撮影はできない。少し抜けた脇の道から見ると元麻布ヒルズが大きくそびえる。

元麻布二丁目付近（西町インターナショナルスクール）



昭和 57 年（1982 年）頃【写真提供：小山浩 氏】



平成 23 年（2011 年）

西町とは善福寺の西側という意味で名づけられた旧町名。昭和 24 年（1949 年）に松方種子によって設立され、現在は WASC 認定校、CIS 認定校となっているインターナショナルスクールである。男女共学で、5歳から15歳(幼稚園から9年生)までの生徒を受け入れている。学校の教育理念は、「国際的な視野を与え、人間性の豊かな育成を通して、人間相互の違いと多様性を受け入れる精神を育てる事」。



昭和 57 年（1982 年）頃【写真提供：小山浩 氏】



昭和 57 年（1982 年）頃【写真提供：小山浩 氏】

西町インターナショナルスクールの中心、松方ハウス（写真左）はアメリカ人建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ的设计により大正 10 年（1921 年）に松方正熊と妻美代子の私邸として建てられ、ここでこのスクールの創立者松方種子や、駐日アメリカ大使ライシャワー夫人となる春子が育つ。その後、各国の公使館、大使館として使用された。昭和 40 年（1965 年）からはスクールの教室および教職員室として活用されている。東京都選定歴史的建築物であり、改修工事は行われたが、建物は昔のままである。



平成 23 年（2011 年）

入口に「がんばろう JAPAN」の旗が 3 本立っている。

安藤記念教会



昭和 57 年（1982 年）【写真提供：小山浩 氏】



平成 23 年（2011 年）

安藤太郎が駐ハワイ総領事時代に文子夫人とともにクリスチャンとなり帰国後、大正 6 年（1917 年）、自宅をふくめた全てを教会として献げた。

後ろの青い三角屋根のところが大正 12 年（1923 年）に開設された付属幼稚園。

建物は今でも当時の姿を留めている。昭和 57 年（1982 年）には日本建築学会より大正・昭和戦前に建てられた貴重な二千棟のひとつに選ばれた。

自治大学校→ありすの杜南麻布



平成 13 年（2001 年）【写真提供：木村雅彦 氏】



平成 23 年（2011 年）

自治大学校は、地方公務員の研修センターとして昭和 28 年（1953 年）に南麻布に設立され、平成 15 年（2003 年）に立川市へ移転した。

現在、有栖川宮記念公園に隣接し環境のよいこの地は港区の特別養護老人ホーム、介護老人保健施設などが集まった複合型介護施設「ありすの杜南麻布」となり、レストラン、コンビニも備えている。



平成 23 年（2011 年）

写真左側は有栖川宮記念公園、大学はこの坂の上、右側になる。坂の下にあるこのスーパーは外国人が多いが、研修生たちにも利用されていた（平成 24 年 3 月現在、改装中）。

四の橋交差点



昭和 53 年（1978 年）【写真提供：港区立港郷土資料館】



平成 18 年（2006 年）【写真提供：港区立港郷土資料館】



平成 23 年（2011 年）

四の橋交差点から薬園坂方向は通りの右側には寺院があり風景は変わらずに保たれている。
左側は化粧品会社、外資系企業、さらに事務所と店舗の複合ビルへと様々に建て替えられた。

Aグループのパネル
近年の麻布の変化を追って

分科会活動の様子



まち歩き（撮影）の様子



分科会（グループワーク）の様子

「麻布七不思議」－江戸と今

江戸時代、本所七不思議、番町七不思議などと並んで有名だったといわれる「麻布七不思議」。奇談や言い伝えなど、七不思議に数え上げられるものは当代の人びとの興味関心によってばらつきがあり、江戸、明治、大正、昭和とさまざまな七不思議が残されている。ここでは、江戸時代に人びとから注目された“不思議”のうち、麻布地区総合支所地下1階にあるレリーフ、「麻布の七不思議」で取り上げている場所や事物に焦点をあて、それぞれの今の表情を紹介する。



平成23年：麻布地区総合支所の地下1階にある、江戸時代の「麻布七不思議」を題材にした壁面のレリーフ。「柳の井戸」「狸穴の古洞」「広尾の送り囃子」「善福寺の逆さ銀杏」「墓池」「長坂の脚気石」「一本松」を七つの不思議としてあげている。このほか、かつて「麻布七不思議」に数えられた主なものとして、「東町の鷹石」、「六本木」、「狸穴の婚礼」、「大黒坂の猫股」、「我善坊の大鼠」、「古川の狸蕎麦」、「谷町の遊女屋敷」、「二本松の赤子」、「白金御殿の一本足」、「釜なし横丁」、「化椿」、「化銀杏」、「秋月の羽衣」などがある。



平成22年（写真左）、平成23年（写真右）：善福寺の参道にある「柳の井戸」。
弘法大師が常陸の鹿島明神に祈願し、手にしていた錫杖を地面に突き立てたところ、清水が湧き出したとの言い伝えがある。



平成22年：かつて洞穴があったと伝えられる狸穴坂下の谷合。写真は、ちょうどそのあたりにある「狸穴公園」。狸穴という地名はその昔、雌狸が棲む大きな穴があったためなど諸説ある。

平成23年：善福寺の「逆さ銀杏」。根がせり上がり、枝先が地面に向かって伸びていることからこの名がある。親鸞聖人が地面に刺した杖から繁茂したともいわれ、「杖銀杏」の別名も。



平成23年：「広尾の送り囃子」の舞台となった広尾が原は、今の広尾から南麻布周辺にかけての一带といわれる。その昔、夜中にそのあたりを通ると、どこからともなくお囃子の音が……。はて、こんな夜更けに？ と耳を澄ますと音はすぐ近くで聞こえ、いったいだれが？ と身構えると、今度はどんどん遠ざかっていったとか。狸のいたずらという説も。

平成23年：大黒坂から見た「一本松」。
天慶2年（939年）頃、平将門を打ち倒した源経基がこの地に来て宿をとった。去るとき、冠装束をこの松にかけていったことから、「冠の松」と呼ばれるようになったとの言い伝えがある。



平成23年：「脚気石」があったとされる場所。その石に塩をかけて拝むと足（脚）の病が治るというところから、脚気石と呼ばれるようになったという。



平成23年：藪の向こうに垣間見える「がま池」。
江戸時代、この池は旗本・山崎治正の屋敷の敷地内にある大きな池であった。近隣で火事が起こったとき、池の主である大墓が口から水を吹きかけて類焼を防ぎ、山崎家の屋敷を守ったという伝説がある。池は昭和期に埋め立てられ、現在はマンションの敷地内に一部が残っている。

麻布の怪！「新・七不思議」

江戸時代、本所七不思議、番町七不思議などと並んで有名だったといわれる「麻布七不思議」。ここでは、新たに「麻布の怪！『新・七不思議』」として数え上げたい事物を集めてみた。



平成 22 年：よく見ると、川岸にひっそりと並ぶ古びた柵。謎めています。



平成 23 年：この階段。左側は新しく細め。右側は古びていて広め。



平成 23 年：青空に金門橋が映えています。海の香りがしたのでは気のせい？



平成 23 年：ずんずんと歩きたくなる、細くて長〜い道。じつは水路跡。



平成 23 年：屋上からニョッキ。巨大磁石か、はたまた角か。



平成 23 年：さあ、いよいよロケットの打ち上げです。というのはウソ。じつはビル。



平成 23 年：緑色の巨人さん。ロッククライミングの練習中？



江戸時代に人びとから注目された“不思議”のうち、麻布地区総合支所地下 1 階にあるレリーフ、「麻布の七不思議」で取り上げている場所や事物を参考として地図上に表示する。

龍土軒発祥の地（六本木 7-4-4）



昭和 56 年（1981 年）：龍土軒近景【写真撮影：田口政典 氏、写真提供：田口重久 氏】



平成 23 年（2011 年）：現在の様子

美術評論家の岩村透が麻布龍土町のフランス料理店「龍土軒」で開いていた洋画家たちのサロンに、若い文学者たちが合流するかたちで、明治 37 年（1904 年）11 月から「龍土会」が始まった。龍土会には国木田独歩、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、徳田秋声など当時の文豪たちも参加し、芸術談義を交わした。当時の自然主義作家のほとんどが来会したので、「自然主義は龍土軒の灰皿の中から生まれた」とさえ言われた。龍土軒は現在、西麻布に移転してる。

志賀直哉居住の跡（六本木 4-3-13）

明治 30 年（1897 年）、14 歳のときに麻布三河台町 27 に移り住んだ直哉は、29 歳までの 15 年間でここで過ごした。雑木林に囲まれた 1600 余坪の広大な屋敷で、直哉は『或る朝』、『網走まで』、『正義派』、『大津順吉』など、初期の作品を書いた。しかし、作家になることに反対していた父との間には確執が生まれ、大正元年（1912 年）にはこの家を出て尾道に移り住んだ。

現在は企業の社宅やマンションとなり、港区教育委員会の案内板が立っている。

『自轉車』という短編の中で、直哉は、自轉車に夢中になっていた 10 代のころを振り返って、麻布の坂道をつぎのように回想しています。「急な坂を登り降りするのは却々に興味のある事で、今の登山家が何山何嶽を征服したといふやうに、私は東京中の急な坂を自轉車で登ったり降りたりする事に興味を持った。赤坂の三分坂は急な割りにそれ程六ヶしい坂ではなく、靈南坂もまだいいとして、一番厄介なのはその隣の江戸見坂で、道幅も相当あり、ジグザグに登れるのだから、登れさうでゐて、これは遂に登りきる事が出来なかつた。」

平成 23 年（2011 年）：港区教育委員会の案内板（志賀直哉居住の跡）



平成 23 年（2011 年）：東京ミッドタウンの隣にあたる



永井荷風旧居の跡（六本木 1-6）

大正 9 年（1920 年）麻布市兵衛町一丁目に新築した木造二階家に移り住んだ荷風は、その家がペンキで塗られていたことから「偏奇館」と名づけ、障子・襖・畳のない、台所を広くした洋風の家の中で、隠棲するような暮らしを始めた。

大正 12 年（1923 年）には関東大震災が起きたが、偏奇館は無事だった。昭和初期からは執筆意欲が旺盛になり、『つゆのあとさき』、『ひかげの花』、『墨東綺譚』など数々の代表作が、ここで生み出された。

しかし、昭和 20 年（1945 年）3 月 10 日の東京大空襲で焼失し、荷風は蔵書などほとんどのものを失った。26 年にわたる偏奇館時代は終わりを告げ、その後荷風が港区に戻ることはなかった。

現在は泉ガーデンとなり、港区教育委員会の石碑が立っている。

荷風は『偏奇館漫録』と題した文章のなかで、「独居に便なり」「隠棲に適せり」「独り窓に倚るも愁思少し」「徐（をもむろ）に病を養ひ静かに書を読むによし」「午睡を貪るによし」などと記している。

昭和 54 年（1979 年）：偏奇館跡近景（永井荷風旧居跡）【写真撮影：田口政典 氏、写真提供：田口重久 氏】



平成 23 年（2011 年）：港区教育委員会による石碑（偏奇館跡）



島崎藤村旧居の跡（麻布台 3-4-17）

麻布飯倉片町 33 番地にあたり、藤村が大正 7 年（1918 年）から昭和 11 年（1936 年）まで 18 年間住んでおり、名作『夜明け前』はこの間に執筆された。現在は石碑が立っている。

当時発表された『飯倉附近』という随筆で藤村はこのように書いている。「よく見れば、この附近には新開の町なぞにないやうな特色の深い小路もある。飯倉二丁目の裏手に隠れてゐる路地、飯倉三丁目にある熊野神社の近くから舊天文臺の方へ登らうとする細い坂になった小路なぞは、私の好きなところだ。舊稲葉邸の角から我善坊の方へ通ふ静かな横町も悪くない。就中、この辺の昔を語つてゐるのは飯倉一丁目の雁木坂であらう。坂の名をガンギといふそのいはれはよく分らないが、駕籠で往来した時代の名残をそこにありありと見ることが出来る。足を踏みしめ踏みしめ昇降したらしい駕籠かきの歩いた路は、あの刻んであるやうな古い石畳みの階段に残つてゐる。」



平成 23 年（2011 年）：現在の様子（島崎藤村旧居跡）

小林多喜二居住の跡（南麻布 1-6-31）

多喜二は小樽高商（現小樽商大）在学中より創作活動を始め、『蟹工船』や『不在地主』で作家として認められた。その後、日本プロレタリア作家同盟の書記長を務めたが、昭和7年（1932年）の文化団体への大弾圧を機に地下活動に入った。

当時の特高（特別高等警察）の捜査から逃れるため、最初の潜伏先は麻布区東町の稱名寺内にあった小さな家の一室だった。4月からここで伊藤ふじ子との結婚生活も始まり、多喜二の本格的な地下活動がスタートした。7月には新網町（麻布十番1丁目）、9月には桜田町（西麻布）と麻布を転々としたが、翌年2月逮捕され築地署で死亡した。



平成23年（2011年）：現在の稱名寺入口

内藤鳴雪 [ないとうめいせつ] 居住の跡（西麻布 4-17-18）

伊予松山藩の藩士として、また教育行政官として働いた後、子規派俳句の重鎮となった内藤鳴雪（1847-1926）は、71歳の時から没年の80歳まで麻布筈町に住んでいた。

『ホトトギス』をはじめ、多くの雑誌、新聞の俳句選者となり、明治の俳句革新運動に大きな功績を残した。当時、人口に膾炙 [かいしゃ] した句としては、「夕月や納屋も厩も梅のかげ」が知られている。

また、筈町在住当時の句としては、「迎へねど年は來にけり七十九」があり、居住の跡には港区教育委員会の案内板が立っている。



昭和54年（1979年）：内藤鳴雪旧邸跡遠景【写真撮影：田口政典氏、写真提供：田口重久氏】



平成23年（2011年）：現在の様子（内藤鳴雪居住の跡）

港区立東町小学校（南麻布 1-8-11）

作家の高見順、山口瞳が小学生時代を送った学校。



平成 23 年（2011 年）：現在の様子（港区立東町小学校）

麻布中学校（元麻布 2-3-29）



平成 23 年（2011 年）：正門（麻布中学校）



平成 23 年（2011 年）：校舎（麻布中学校）

俳人の荻原井泉水、作家の広津和郎、吉行淳之介、山口瞳、北杜夫、なだいなだ、文芸評論家の奥野健男など、多くの文学者が青春時代をすごした学校。1930 年代に建てられ、吉行らが学んだ鉄筋コンクリート造 3 階建の校舎が、現在も使われている。

北杜夫は当時の思い出を次のように書いている。「私が二年生のときに太平洋戦争が始まった。やがて登校にもゲートルばきで、先生には挙手の礼をしなければならなかった。市電で通う生徒は、赤十字下の駅で降りることは許されず、一つ前の駅、霞町で降りて、朝礼のサイレンに遅れようものなら立たされるので、赤十字下まで歩き、ついであの坂をジユツツなぎになって尻の辺りでゆるるカバンをおさえて駆け登ったものであった。[...] それでも麻布特有ののんびりした雰囲気は残っていた。私の下級生時代、博物同好会というのがあったが、上級生に連れられて、有栖川公園に観察にゆき、トタテグモの巣やらホコリタケやら梅林に現れるテングチョウを教えてもらった。」（『麻布学園の 100 年 文集』）

参考資料：「港区ゆかりの人物データベース」(<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/yukari/j/>)

「港区産業観光ネットワーク MINATO あらかると」(<http://www.minato-ala.net/sightseeing/welcome/root59/index.html>)

筈橋跡



昭和34年（1959年）：筈橋跡【写真提供：港区立港郷土資料館】



昭和46年（1971年）：筈橋跡【写真提供：港区立港郷土資料館】



平成23年（2011年）：筈橋跡



麻布一本松と同様、源経基にまつわる伝説を持っており、小さな橋ながら『江戸名所図会』に挿し絵が残っている。

筈橋は、西麻布付近から古川へ流れる筈川にかかっていた。現在、筈川は暗渠になっているが、水流は、今でもマンホールの下を流れている。

筈橋を渡り牛坂へと上っていく途中に、現在は、教会や私立幼稚園がある。近くには、この筈橋の名前のついた、筈小学校がある。

筈[こうがい]とは、髪をかき上げるのに使った、箸[はし]に似た細長い道具、女性の髷[まげ]に横に挿して飾りとする道具もある。

「筈橋」【資料：『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】

善福寺付近



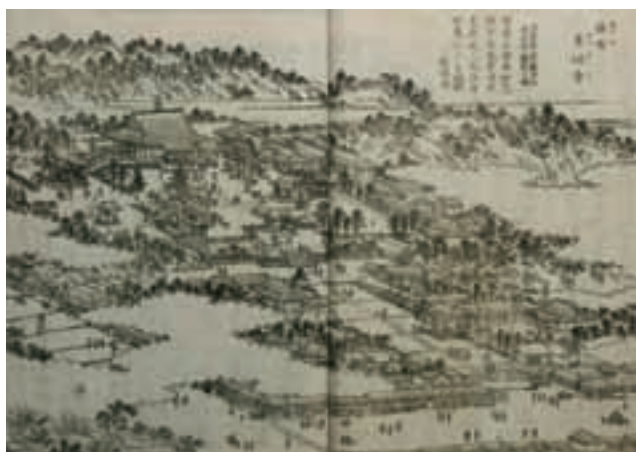
戦災消失前の本堂【写真提供：港区立港郷土資料館（資料：『港区の文化財第9集』）】



昭和34年（1959年）：善福寺【写真提供：港区立港郷土資料館】



平成23年（2011年）：現在の善福寺参道から大銀杏方向。



「麻布七不思議」にも登場する銀杏の巨木や、アメリカ公使館が置かれていたことでも知られる善福寺。『江戸名所図会』にも残る銀杏の巨木は逆銀杏として現在も見ることができる。善福寺右手の山には、第二次世界大戦末期、本土決戦用の地下壕が建設され、完成前に終戦となっている。その後、壕は埋め戻された。

「麻布善福寺」【資料：『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】

広尾付近



平成 5 年（1993 年）：広尾駅入口遠景【写真撮影：田口政典氏、写真提供：田口重久氏】



平成 24 年（2012 年）：広尾駅入口遠景



「広尾原（廣尾原）」【資料：『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】



「広尾毘沙門堂（廣尾毘沙門堂）」【資料：『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】

『江戸名所図会』を見ると、毘沙門堂の向こうに広大な野原と古川、筈川の流れる田園風景が広がっている。現在の東京メトロ広尾駅付近を流れる筈川の暗渠が港区と渋谷区の境界となっている。

一本松付近



昭和 34 年（1959 年）：一本松坂【写真提供：港区立港郷土資料館】



「麻布一本松の図」【資料：『新撰東京名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】



平成 23 年（2011 年）：代々植え継がれてきた松の木。



「麻布一本松」【資料：『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】

筈橋と同様、源経基にまつわる伝説を持っており、江戸時代から明治にかけての絵が伝えられている。麻布十番交差点から、有栖川宮記念公園方面に山を登った山頂付近に今も立っていますが、松は枯れるごとに代々植え継がれ現在に至っている。この付近の旧地名、一本松町の由来となっていた。

赤羽橋 (空からの麻布)



「赤羽」【資料：『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵】



平成 23 年 (2011 年) : 六本木ヒルズ展望台から左の『江戸名所図会』の方向に近いように撮影した現在の風景。



平成 23 年 (2011 年) : 貿易センタービル展望台から麻布方向を望む。



昭和 39 年 (1964 年) 頃 : 上空から見た六本木 5 丁目付近【写真提供 : 東洋英和女学院】



平成 23 年 (2011 年) : 六本木ヒルズ展望台からの眺め。

江戸末期に長谷川雪旦により描かれた『江戸名所図会』の「赤羽」は、現在の赤羽橋付近を中心に、高所から見下ろしたように描かれ、海が現在と比べ近くにあった様子が見られる。この絵図から、視点を変えて、高所から見た麻布について着目してみた。

工場・民家・公園とその周辺



- ①昭和 30 ~ 40 年代 : 南麻布 4 丁目 (都営住宅をはさみ安立電気本社を望む)【写真提供 : 豊田幸雄 氏】
- ②昭和 43 年 (1968 年) 頃 : 広尾病院から南麻布 4 丁目 (天現寺橋交差点を望む)【写真提供 : 豊田幸雄 氏】
- ③昭和 30 ~ 40 年代 : 南麻布 4 丁目 (都営住宅をはさみ安立電気本社を望む)【写真提供 : 豊田幸雄 氏】
- ④昭和 30 年 (1955 年) 頃 : 東麻布 3 丁目【写真提供 : 今清水正巳 氏】
- ⑤昭和 43 年 (1968 年) : 有栖川宮記念公園園内の景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑥昭和 43 年 (1968 年) : 有栖川宮記念公園園内の景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑦昭和 55 年 (1980 年) : 乃木大将生誕の地碑遠景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑧昭和 59 年 (1984 年) : 筭公園園内の景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑨昭和 63 年 (1988 年) : 筭公園近景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑩平成 3 年 (1991 年) : 六本木公園園内の景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑪平成 3 年 (1991 年) : 六本木公園園内の景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】
- ⑫平成 3 年 (1991 年) : 六本木公園園内の景【写真撮影 : 田口政典 氏、写真提供 : 田口重久 氏】

①	②	④
	③	
⑤	⑥	⑦
	⑧	⑨
⑩	⑪	⑫

失われた坂とその周辺

玄碩坂

現在の六本木ヒルズ、さくら坂付近にあった坂。
開発後、道付けが変更され周囲の景色は大きく変化している。

- ①昭和 50 年 (1975 年) : 玄碩坂坂上から
- ②昭和 59 年 (1984 年) : 玄碩坂坂上を
- ③昭和 50 年 (1975 年) : 玄碩坂坂上を
- ④昭和 59 年 (1984 年) : 玄碩坂標柱近景
- ⑤昭和 50 年 (1975 年) : 玄碩坂坂下から
- ⑥昭和 59 年 (1984 年) : 玄碩坂坂上から
- ⑦昭和 59 年 (1984 年) : 玄碩坂標柱詳細
- ⑧昭和 50 年 (1975 年) : 坂下から東京タワーを

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	



Bグループのパネル
古い麻布の写真(昭和の記録)

首都高速道路建設とその周辺



- ①昭和 42 年 (1967 年) : 高速道路工事中 (二之橋付近)
- ②昭和 42 年 (1967 年) : 高速道路工事中 (一之橋付近)
- ③昭和 42 年 (1967 年) : 麻布十番 (一之橋付近)
- ④昭和 41 年 (1966 年) : 高速道路工事中 (溜池付近)
- ⑤昭和 41 年 (1966 年) : 高速道路工事中 (溜池付近)
- ⑥昭和 44 年 (1969 年) : 三之橋付近 (麻布・都電最後の日)
- ⑦昭和 43 年 (1968 年) : 高速道路工事中 (溜池付近)
- ⑧昭和 43 年 (1968 年) : 高速道路工事中 (溜池付近)



古い麻布の写真

【写真撮影：田口政典氏、写真提供：田口重久氏】

田口重久氏より、南満州鉄道で電気技師をされていた、お父様の田口政典様が撮影、整理されていた 1960 年代から 1990 年代にかけて変貌を遂げる東京の街の写真アルバムより、麻布に関する写真データのご提供をいただきました。

①	②
	③
④	⑥
⑤	
⑦	⑧

素敵ポイント@麻布

- ①平成 23 年：ムーミン谷の守り神のような・・・@六本木 5 丁目
- ②平成 23 年：観察されているのでしょうか？@六本木 5 丁目
- ③平成 23 年：鬼瓦@善福寺
- ④平成 23 年：NY ではございません@六本木 5 丁目
- ⑤平成 23 年：麻布で発見！酒屋の軒先の杉玉@元麻布 3 丁目
- ⑥平成 23 年：暑い日には生きカエル@横川省三記念公園
- ⑦平成 23 年：金次郎さんを後ろから@南山小学校
- ⑧平成 23 年：看板娘とお地蔵さま@六本木 7 丁目
- ⑨平成 23 年：みんな並んでどちらへ？@六本木高校
- ⑩平成 23 年：under construction@元麻布 3 丁目
- ⑪平成 23 年：影まで美しいジャングルジム@宮村児童遊園
- ⑫平成 23 年：六本木で木のオブジェ@六本木高校



①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨
⑩	⑪	⑫

Bグループのパネル 現在の麻布（名物・風物など）

レトロモダン@麻布



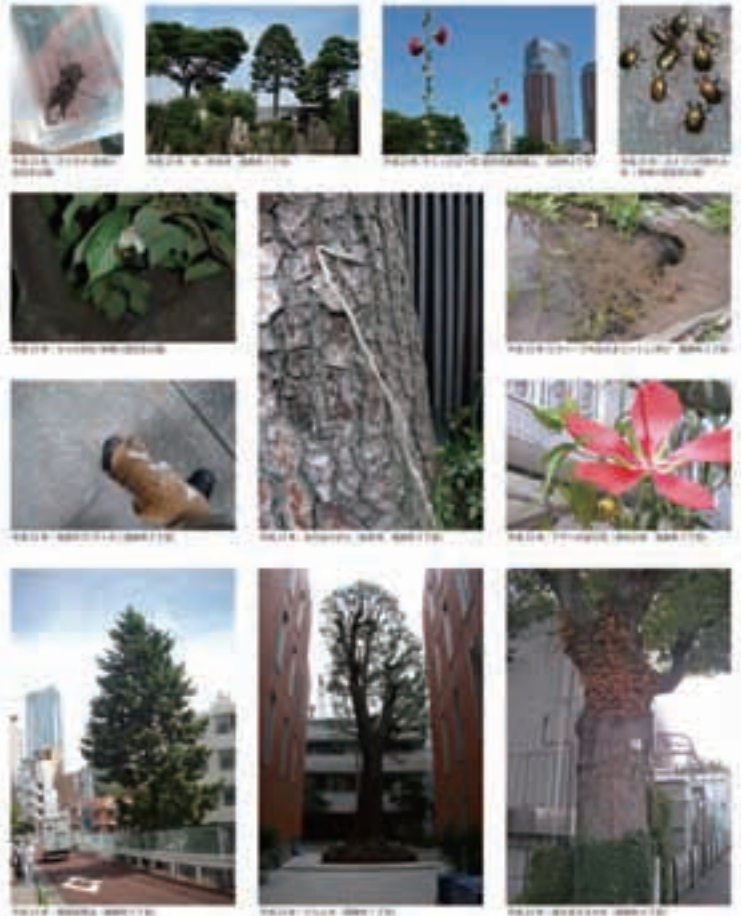
- ①平成 23 年：元麻布 3 丁目付近
- ②平成 23 年：南麻布 5 丁目付近
- ③平成 22 年：元麻布 3 丁目付近
- ④平成 23 年：南麻布 3 丁目付近
- ⑤平成 23 年：南麻布 3 丁目付近
- ⑥平成 22 年：六本木 7 丁目付近
- ⑦平成 22 年：六本木 5 丁目付近
- ⑧平成 23 年：元麻布 3 丁目付近
- ⑨平成 23 年：南麻布 2 丁目付近
- ⑩平成 23 年：麻布十番 2 丁目付近
- ⑪平成 23 年：麻布十番 2 丁目付近

①	③	④
②		⑤
⑥	⑦	⑧
⑨	⑩	⑪

麻布の生きもの

- ①平成 22 年：クワガタ（有栖川宮記念公園）
- ②平成 23 年：松（称念寺 南麻布 3 丁目）
- ③平成 23 年：すくっと立つ花（宮村児童遊園上 元麻布 2 丁目）
- ④平成 23 年：カナブンの群れる木（有栖川宮記念公園）
- ⑤平成 23 年：セミの羽化（有栖川宮記念公園）
- ⑥平成 22 年：地域ネコ「チャオ」（西麻布 3 丁目）
- ⑦平成 23 年：蛇のぬげがら（称念寺 南麻布 3 丁目）
- ⑧平成 22 年：ピオトープのおたまじゃくし（筈小 西麻布 3 丁目）
- ⑨平成 23 年：アゲハの遊ぶ花（本村小前 南麻布 3 丁目）
- ⑩平成 23 年：堀田坂周辺（南麻布 5 丁目）
- ⑪平成 23 年：ビルと木（西麻布 1 丁目）
- ⑫平成 23 年：崖を支える大木（西麻布 4 丁目）

①	②	③	④
⑤			⑧
⑥	⑦		⑨
⑩	⑪		⑫



Bグループのパネル
現在の麻布（名物・風物など）

麻布の急坂



山の手台地の端に位置する麻布、台地下を沿うように古川が流れ、山の手台地より、古川に向かい、入り組んだ谷が形成されている。そのため、古来起伏に富み、伏流水も豊富に湧く地域であった。現在でもあちこちに、急な階段や、水路が残されている。

- ①平成 22 年：あちこちに古い階段が残り、また利用されている。（麻布永坂町）
- ②平成 22 年：再開発されても、長い階段がもともとの地形を伝えている。（西麻布）
- ③平成 23 年：趣深い古い石の階段が突然現れる。（元麻布）
- ④平成 23 年：水路を暗渠にして道になっている。現在でも管理が下水道局であることも興味深い。（麻布十番）
- ⑤平成 23 年：この付近は今でも豊富なわき水があり、暗渠に向かい音をたてて流れている。（元麻布）
- ⑥平成 23 年：本村町貝塚。縄文時代前期、約 6 千年前の人々の暮らしの跡が眠る本村町貝塚。土器、アカガイ製の貝輪、ハマグリ製の貝刃など、縄文時代の道具も見つかっており、都心に残る貴重な遺跡となっている。
- ⑦平成 23 年：3 階にも上の道に出る出入口がある建物も見られる。（南麻布）
- ⑧平成 23 年：自転車の性能テストにもかわれていたと言われる急坂。（麻布潮見坂）

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	

宇宙につながる麻布



平成 21 年(2009 年):政策研究大学院大学の卒業式。世界中から学びに来る学生達、背景は現在も保存されている東京大学生産研究所の建物の一部。



開発メンバーの集合写真。中心に日本の宇宙開発・ロケット開発の父糸川英夫博士の若かりし頃の姿。【写真提供: JAXA/ISAS】



六本木でロケット研究が行われていた当時の国産ロケットカッパ(K-8)。【写真提供: JAXA/ISAS】

現在、政策研究大学院大学や国立新美術館のある場所には、糸川英夫教授がペンシルロケット等の研究・開発を行っていた東京大学生産技術研究所が設けられていた。実際の燃焼試験設備等は千葉実験所(西千葉)に置かれたが、生産技術研究所に所属する教授の研究室は六本木にあった。

当時、宇宙研究部門は組織化されておらず、様々な研究室から有志が参加して実施され、実験データの研究会や試験の実施に係る打ち合わせ等は六本木で行われていたようだ。

昭和 37 年(1962 年)から、昭和 39 年(1964 年)に東京大学駒場キャンパス内に「東京大学宇宙航空研究所」が設置され、日本が名実ともに宇宙開発の拠点となるようになるまでの 2 年間、主だった関係者は六本木の地に集まって研究に取り組んでいた。

3.11@麻布



- ①地震翌日の六本木ヒルズ展望台
- ②再生可能エネルギーが無償電源として来場客に提供されているカフェも
- ③夜間照明の電源として使われているソーラーパネル
- ④地震後の六本木ヒルズ
- ⑤校庭に避難する小学生
- ⑥強い地震で先端が曲がった東京タワー
- ⑦震災から立ち直ろうというメッセージも
- ⑧震災後、斧公園から大使館に続く人の列
- ⑨スーパーにて
- ⑩家具転倒防止器具等助成のお知らせ
- ⑪徒歩で帰宅する人の列は深夜まで
- ⑫麻布地区総合支所の震災相談窓口

①	②	③
④	⑥	⑦
⑤	⑧	⑩
⑧	⑨	
⑪	⑫	

東日本大震災により経緯度原点が真東に約 27cm 移動



平成 23 年 (2011 年) : 東日本大震災後の経緯度原点位置の測地【写真提供: 国土交通省国土地理院】



平成 23 年 (2011 年) : 東日本大震災後の経緯度原点位置の測地



平成 23 年 (2011 年) : 東日本大震災後の経緯度原点位置の測地



麻布飯倉時代の東京天文台【写真提供: 国立天文台 (NAOJ)】



昭和 34 年 (1959 年) : 旧子午儀跡に設けられた日本経緯度原点標【写真提供: 国立天文台 (NAOJ)】



平成 23 年 (2011 年) : 中心の金属標が日本経緯度原点



平成 22 年 (2010 年) : 震災前の原点数値が標示されている



平成 22 年 (2010 年) : 日本経緯度原点標 (全景)



平成 24 年 (2012 年) : 金属標が大地震により約 27cm 真東に移動



平成 24 年 (2012 年) : 震災後に書き換えられた原点数値

日本経緯度原点は、明治 25 年 (1892 年) 当時、麻布飯倉にあった東京天文台の経緯度観測の観測台である子午環の中心を原点数値 (経度・緯度・原点方位角) として定められた。大正 12 年 (1923 年) の関東大地震には子午環が崩壊したが、昭和 36 年 (1961 年) にその位置に金属標を設置し、日本経緯度原点を再現した。平成 13 年に測量法が改正され測量の基準として世界測地系を採用することになり、原点の経度、緯度及び方位角は東経: 139 度 44 分 28 秒 8759、北緯: 35 度 39 分 29 秒 1572、方位角: 32 度 20 分 44 秒 756 (つくば超長基線電波干渉計観測点に対する値) に改正された。

さらに、平成 23 年 (2011 年) 東北地方太平洋沖地震の影響による地殻変動が観測されたため、平成 23 年 10 月 21 日に、東経: 139 度 44 分 28 秒 8869、北緯: 35 度 39 分 29 秒 1572、方位角: 32 度 20 分 46 秒 209 (つくば超長基線電波干渉計観測点に対する値) に改定された。

※経緯度 1 秒 (1") は日本周辺で約 30m、1/10,000 秒 (0.0001") は 3mm。

この地殻変動により日本経緯度原点は真東に約 27cm 移動した。

なお、麻布飯倉にあった東京天文台は関東大震災後、三鷹に移転し、現在は国立天文台として当時の観測機器 (子午環・子午儀) を常時公開している。

今なお流れる麻布の水脈

Bグループのパネル
今なお流れる麻布の水脈



写真提供：港区立港郷土資料館（右下、「昭和 30 年：一之橋付近（古川清掃）」及び「平成 18 年：一之橋付近」）

副座長 小山 浩 (Aグループ)

私たちのまち歩きはガイドがいるわけでもなく、ただ写真を写しまくりながら歩くという面白い行軍です。しかし最近まであったマンションが取り壊されていたりして、麻布は本当にまち並みの変化が激しいです。

私は元麻布とか南麻布ののんびりしていてとても静かな通りが好きです。鳥の種類も多いです。通りを一つ曲がると大分違う風景に遭遇します。都心とは思えませんが、急に大型バイクに乗った外国人が通り過ぎたりして、やはり麻布なのだなと実感します。

このような環境で育ったものなので私ものんびりしていて、メンバーの皆様にご迷惑をお掛けしているか、どうかも、よく分からないのですが、「麻布未来写真館」は今年で4年目ですので過去3年間の蓄積を使いながら、また新しいメンバーを迎えて活発な活動を続けて行きたいと思います。



本村小学校の近くにて。3月

メンバー 増子 照孔 (Aグループ)

今年度のまち歩きは、以前住んでいた南麻布でした。マンションの建物はそのままでしたが、養護学校も無くなり、周辺の建物や環境が余りにも変化しているのに驚き、時の流れと麻布の日々の移り変わりを実感しました。

アンケートを拝見し、興味を持ってくださる方や懐かしんでくださる方がいらっしゃる事を知り、尚一層、皆さまの心を和ませる作品を作ってゆきたいと思います。皆さまの言葉を大切に育ててゆきたいので、良し悪しのご意見をくださるようお願いいたします。私たちも自己満足にならぬよう、またマンネリにならぬよう心してゆきます。

生まれ育った方や定年退職なさった方々の参加を願っております。ご一緒に区民の心が入った夢のある「麻布未来写真館」にしたいと思います。

メンバー 水野 禮子 (Aグループ)



上から見た谷町ジャンクション

(平成23年度「第3回まち歩き」にて)

麻布のまち並みを、過去、現在、未来に映像を残していけたらと思い参加しております。

本年度は麻布のまちの1970年代以降から現在のまち並みの状況を比較して見えています。都内でも最も変貌が激しいアークヒルズ、六本木ヒルズ。次に六本木交差点、旧東京大学生産技術研究所、国立新美術館などを写真に収めました。

これからも麻布のまち並みなどの伝承を未来に伝える記録写真を撮っていきたくて思っております。

これまでの活動を振り返って

メンバー 臼井 浩之 (Aグループ)

3年間、「麻布未来写真館」のお手伝いをさせて頂きました。麻布各地の今を写真に撮り、その姿を探ることで、まちの変化やその背景、歴史や文化などに至るまで触れる事になります。特に昔の写真をきっかけて調べてみると、麻布というまちが常に日本の政治的・文化的変化に大きくかかわって来た事を強く感じます。

生まれ育った麻布ではありますが、さらに近いものすることが出来ました。撮影してきたこの3年間でも場所によっては大きく変化しましたが、自分の麻布に対する思いも大きく変わったように思います。

写真が身近なものになって100年にも至りませんが、街並みを残し、風俗を伝え、歴史をひも解く最高の手段の一つではないでしょうか。戦争や震災により多くの写真が消失してしまい、昔の写真の収集は簡単ではありませんが、だからこそ、大きな変化をしている今の麻布を記録に残し、それらを整理しながら伝えて行く事が大切です。

この「麻布未来写真館」の活動を通して、一人でも多くの人が麻布の歴史や文化に興味を持ち、このまちに思いを寄せてくれれば幸いです。

メンバー 横島 久子 (Aグループ)

「麻布未来写真館」に携わって今年で3年目となりました。昨年度までは昔の写真を手がかりに、現在の麻布を撮りながら、いろいろ発見もありましたが、過去の写真の入手が大変でもありました。

今年度は、1980年以降の麻布をテーマに見てまいりました。その中で私が感じたことは、住まい、店舗などの急速な変化でした。一戸建木造住宅はマンションに、客と向き合っただう店は大型スーパーマーケットのような携帯に大きく変わってきていることです。それは、六本木一丁目付近で再開発前の商店街(旧：谷町)の写真を見て思いました。

現在、その商店街の賑わいや生活を、いま想像することさえできません。そこで現在残されている麻布十番、東麻布のような商店街の姿を、あたたかい街並みの生活を、後世に残してゆきたいと思いました。



メンバー 鈴木 順二 (Bグループ)



生まれ育った麻布のことをもっとよく知りたい—そんな思いから参加させていただいた「麻布未来写真館」。

まち歩きやパネル展の準備は、麻布について色々と学ぶとても良い機会となりました。

昭和の写真に見入る自分のように、今の街の姿を「懐かしいなあ」と思って見てくれる人がいつかいるかもしれない—カメラをかまえて、そんなことを考えています。

メンバー 磯和子 (Bグループ)

麻布・六本木地域は大使館が多く立地し、多くの文化が仲良く共存する魅力的な街です。魅力あるこの街で、地域の持つやさしさが失われることなく、安全で暮らしやすい街になってほしいと思います。

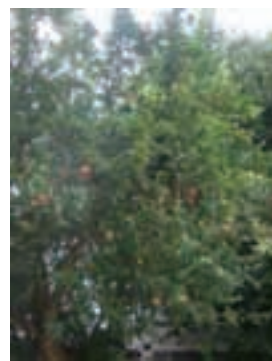
また、平成23年(2011年)3月11日の東日本大震災以来、人々の価値観が大きく変化しつつあるなか、地域のあり方、かかわり方も変化しています。

これからも、この地域の歴史や文化・温もりを大切に残していきたいと思います。



メンバー 入江誠 (Bグループ)

この1年、関心を持って麻布のまち歩きをして、ビルの建ち並ぶ中に憩いの場所を発見し、心を弾ませています。50年前の地図を頼りに、旧町名を求めて歩く楽しみを見付けました。その中で、都会で咲く「樹の花」にも目を向けて見たいと思います。



メンバー 椿由美子 (Bグループ)

昨年度からメンバーに加えていただき、あっという間に二年が過ぎたように感じております。

坂道、水脈、生き物、歴史から文学、宇宙にいたるまで、本年度はいちだんとテーマのすそ野が広がり、麻布という街の底力、奥深さを再確認するところとなりました。

区民の方々からお寄せいただいた古い写真はいずれも興味深く、感動的で、拝見しながら歓声をあげることもしばしばでした。

街あるきでは、うれしい発見やわくわくするような出会いがいくつもありました。

かつては水路だったという細長い路地。公園の木陰で羽を休めていた水色のトンボ。崖の上に咲く立葵の凛とした姿。お寺さんの庭先で見つかったというへびの抜け殻。夏の街あるきでは、お日さまの匂いがしたことを思い出します。

閉鎖され、取り壊される日を待つ、ひっそりとしたオフィスビル。完成に向けて着々と形づくられてゆく近代的な高層ビル。建物が解体され、ビルの狭間にぽっかりと顔を出した茶色い地面。幹線道路の周辺では、こうした大規模な再開発の現場にも遭遇しました。

めまぐるしく姿を変えてゆく街も、ゆっくり歩いてみると、味わい深く、心ひかれるものがいろいろと見えてくるようで、興味は尽きません。

この街の力や素顔を、ファインダーを通して切り取り、一つでも二つでも未来につなげてゆけるように、これからもつとめてまいりたいと思います。

みなさま、一年間、ありがとうございました。

これまでの活動を振り返って

メンバー 岡崎 純子 (Bグループ)



「麻布未来写真館」のまち歩きのお楽しみは、「発見」です。普段、何げなく通り過ぎていた麻布のまちの中を、撮影を目的として、メンバーの方々とひと昔前の話しをしながら歩くことで、いろいろなものが見えてくるのが不思議です。

楽しいまち歩きですが、今、私たちメンバーが撮った写真が記録として残っていくことの重要さを考えさせられる一年でもありました。

この活動にご協力いただきました皆さま、関係者の皆さまに感謝しております。

酒屋の軒先の杉玉 (平成 23 年度「第 3 回まち歩き」にて)

メンバー 天羽 大器 (Bグループ)

麻布は坂と川の街である。標高差が他の地区(赤坂・青山、芝、高輪、芝浦港南)と比べて大きい。六本木交差点、六本木ヒルズ、麻布地区総合支所は 30m であるのに対して、一の橋交差点から四の橋交差点という古川沿いは 5m ~ 6m である。

今年度は東日本大震災を受けて始まった。防災、地形、地盤というテーマが様々な所で言われた。今年度の「麻布未来写真館」のまち歩きもこのテーマで写真を撮ってみた。

川でいうと筈川、藪下から麻布十番の支流、吉野川、麻布宮村町支流、麻布本村町の水路である。坂でいうと永坂、於多福坂、潮見坂、鳥居坂、堀田坂、北条坂、奴坂、薬園坂、仙台坂、大黒坂、狸坂、大横丁坂である。

このまち歩きで撮った写真を使用して「今なお流れる麻布の水脈」というパネルが出来た。今年度ある区民の方から麻布の坂を撮った写真を数多く頂いたのをこれを使用してパネルを来年度作ってみたい。

メンバー 櫻井 綾 (Bグループ)

昨年度に引き続き参加させていただきました。

私たちに「大きな何か」を残した昨年の大震災後、様子を見ながら始まった今年度。被災地における写真の意味を思う時、私達のまち歩きの結果として切り取られた風景は、未来の人にどんな印象を与えるのか…。そんなとりとめもない事を考えた年でした。

まち歩きの結果としてできあがったパネルには震災の影響の有るもの／無いものそれぞれの風景を観ることができます。特筆すべきそんな平成 23 年度の「麻布未来写真館」での活動に(後ろからついていくだけですが…)参加できて、ただただ関係各位の皆さまに感謝の気持ちです。ありがとうございました。



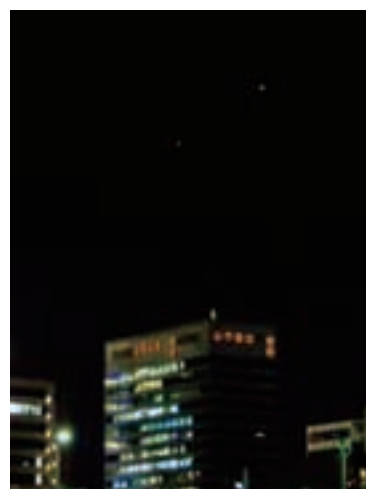
椅子のある公園@永坂上遊び場
(平成 23 年度「第 1 回まち歩き」にて)

座長 近藤 敏康 (Bグループ)

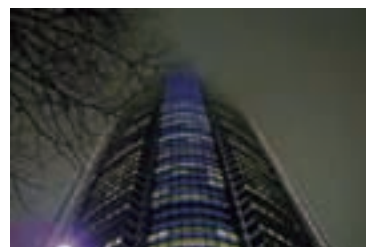
麻布地区総合支所の独自の事業である「麻布未来写真館」、本年度も地元の企業、区民、ゆかりの方々が協働し、麻布の現在と過去の写真を残して、麻布に興味や愛着をもってもらおうという目標のもと、ご参加の皆さま、パネル展を見てくださいる方々の両方にとり、楽しく充実した活動になって欲しいと考え精力的に活動を行って参りました。

今年は、「こんなこと知らなかった」、「へえ～そうなの」「おもしろいね」といった、住んでいても知らないような情報を盛り込むとともに、3.11の震災の影響を生活目線と、科学的な目線の両面からとらえる工夫などもこらしました。CATVの番組でご紹介いただいたのをきっかけとして、メンバー独自のルートや、古い写真をお持ちの方々からのご協力も得られやすくなり、貴重な情報や写真を多数収集、パネル展にも利用することができ、本年も充実した活動ができたと感じております。

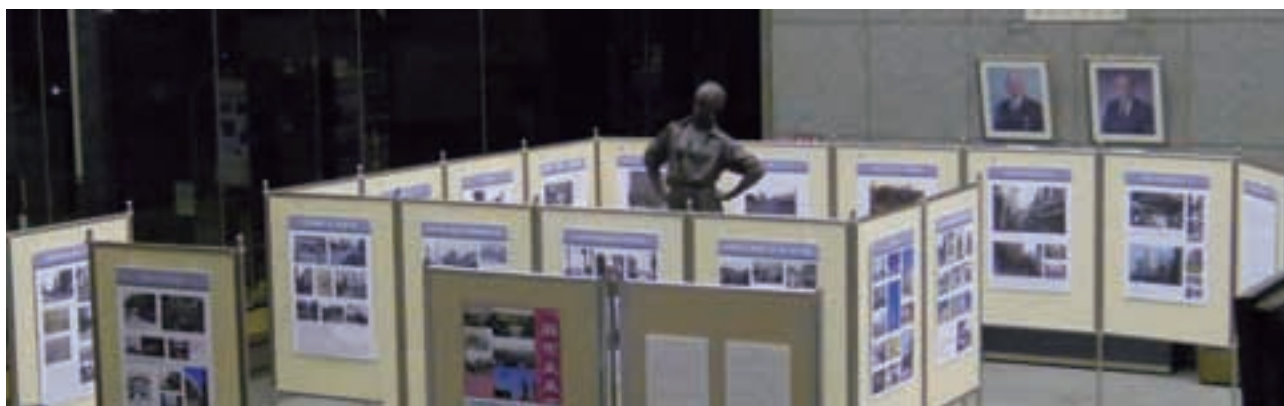
今後は、制作したパネルのインターネットでの公開、撮影した写真の港区ホームページでの利用等、さらなる活用方法の検討等も含め、次のステップに向けご参加の皆さまと話し合いながら、進めていければと思っております。



麻布に輝く金星と木星



これまでの活動を振り返って
メンバーのことば



講師 達川 清 (フォトグラファー)

「麻布未来写真館」参加メンバーの皆さんは本当に熱心です。新たにメンバーを迎えいっそう楽しい活動になりました。

大地震後の経緯度原点の移動、雨の中、三鷹天文台見学。夏の酷暑にもめげずの「まち歩き」撮影。ユニークなテーマ選び、古い写真の提供もありがたく、内容もより深くなってきました。

写真の良さも一段と上達して嬉しい限りです。



2011年3月11日。この大震災は麻布地区にも大きく影響した。一見何の変わりもない様子だが、経緯度原点が大きくずれたことは、この地震の大きさを示すものです。

分科会活動記録（平成 23 年度）

- 平成 23 年 5 月 20 日 第 1 回分科会（メンバー紹介、平成 23 年度の活動について）
6 月 24 日 第 2 回分科会（今年度の進め方、まち歩きについて）
7 月 3 日 第 3 回分科会（A グループまち歩き：第 1 回撮影）
7 月 10 日 第 3 回分科会（B グループまち歩き：第 1 回撮影）
7 月 29 日 第 4 回分科会（撮影結果・まち歩き・パネル展について）
9 月 4 日 第 5 回分科会（A グループまち歩き：第 2 回撮影）
9 月 17 日 第 5 回分科会（B グループまち歩き：第 2 回撮影）
9 月 29 日 第 6 回分科会（撮影結果・まち歩き・パネル展について）
10 月 30 日 第 7 回分科会（B グループまち歩き：第 3 回撮影）
11 月 20 日 第 7 回分科会（A グループまち歩き：第 3 回撮影）
11 月 25 日 第 8 回分科会（撮影結果・パネル展について）
12 月 15 日 第 9 回分科会（パネル展の開催に向けて）
平成 24 年 1 月 13 日 第 10 回分科会（第 1 期パネル展に向けて）
2 月 3 日 パネル展 富士フィルムフォトサロン ミニギャラリー（～ 2/23）
2 月 3 日 第 11 回分科会（第 2 期パネル展に向けて）
2 月 20 日 パネル展 東洋英和女学院史料展示コーナー（～ 3/2）
2 月 20 日 パネル展 ありすの杜南麻布地域交流スペース（～ 3/2）
2 月 20 日 パネル展 港区麻布地区総合支所ロビー（～ 3/2）
2 月 27 日 第 12 回分科会（パネル展について、収集写真の状況について）
3 月 9 日 第 13 回分科会（第 3 期パネル展に向けて、活動報告について）
3 月 19 日 パネル展 港区役所ロビー（～ 3/30）



まち歩きの様子

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つ子どもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和 60 年 8 月 15 日

港 区

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会 平成 23 年度 活動報告

刊行物発行番号
23271-1435

平成 24 年（2012 年）3 月 発行

発行 港区 麻布地区総合支所 協働推進課

〒106-8515 東京都港区六本木 5 丁目 16 番 45 号

電話 03-5114-8802

《主な参考文献・資料等》：増補 写された港区 三（麻布地区編）～麻布・六本木ほか～ 港区教育委員会
《古い写真についての写真等提供及び資料》：『24 時間都市 ARK HILLS』（社団法人全国市街地再開発協会）、小山浩氏、六本木商店街振興組合、森ビル株式会社、木村雅彦氏、港区立港郷土資料館、『新撰東京名所図会』（港区立港郷土資料館所蔵）、『江戸名所図会』（港区立港郷土資料館所蔵）、今清水正巳氏、田口重久氏、豊田幸雄氏、国土交通省国土地理院、国立天文台（NAOJ）、JAXA/ISAS（順不同）
《技術・会場協力等》：達川清氏（フォトグラファー）、富士フイルム株式会社、学校法人東洋英和女学院、ありすの杜 南麻布

©禁無断転載複製

ファインダーをとおして、
未来に向けた新しい麻布を発信していきます。

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会 平成 23 年度 活動報告

港区麻布地区総合支所

港区麻布地区総合支所では、区民や企業、大学等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取り組みとして「麻布未来写真館」事業を実施しています。

